慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戸田家族理論の特徴と問題点 : 有賀理論を考える手がかりとして
Sub Title	
Author	坂井, 達朗(Sakai, Tatsuro)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2000
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.5 (2000.) ,p.82- 83
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集II: 「有賀喜左衛門と社会学」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20000000-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田社会学第５号（2000）

戸田家族理論の特徴と問題点

有賀理論を考える手がかりとして

坂井　達朗

戸田家族理論の特徴であり、同時にその問題点でもあるのは、戸田が「感情融合」と呼んだ、家族生活者に特有の心的態度に関わる問題、つまりそれが何処から、何故に生み出されるかという問題であると考える。そうして有賀理論の位置づけを考える時、この点を検討することが一つの手がかりとなるのではないだろうか。以下与えられた紙数が少ないので、筆者の意見の要点のみを述べ、その戸田理論の分析の詳細は、すべて拙旧稿（「戸田家族理論の一つの理解の仕方」「三田学会雑誌」　１９９０年３月、および『戸田貞三著作集』第Ｉ期「家族論」解題　１９９３年　大空社）に譲ることにする。

まず戸田の主著「家族構成」（１９３７年　弘文堂）によってこの問題を確認すると、そこでの説明は必ずし首尾一貫していないことがわかる。先ず夫婦関係について、戸田は「人々は互に感情的に強く合一化し得る配偶者を求め、内的に深く信頼し得る相手方を得る事によって、内的生活の安定を見出し得る」（６９頁）として、夫婦結合が成立するためには、男女相互の信頼的没我的態度、すなわち感情融合が前提であると説明しており、その態度そのもののが何に起因するかについては、説明していない。

しかし親子の結合については、「血縁連鎖の最も強い者の間に生ずる自然的の愛情に基く結合」（１２９頁）と説明されており、また近親者の間の結びつきについては、一方で「親子と同様に、相手方に対する愛着心に基いて相手方を信頼し、之に結びづくのであるが、その結びつきの程度は血縁の濃淡に応じて異って居る」（１３６頁）とし、また「一家族の内に於ても、世代を重ねることに於て近親者が増加する場合には、一方に於て血縁連鎖の強弱の差に応じて人々相互間に感情融合の差が生じ易く、又他方に於て此等の近親者が各自の配偶者を得るに従って、血縁者相互間に次第に何程かの隔てが起り易くなる」（１１３－４頁）とも説明している。つまりここでは、感情融合は血縁連鎖の事実から生まれてくると考えられているように理解される。

さらに「政略結婚」など、結合の前提として「感情融合」の存在が考え難い場合（１１９－２０頁）や、「事実上家族として共同して居る人々の内的態度」を論じた部分（４７－８頁）では、「感情融合」は結合の前提ではなく、むしろその結果生まれるものであると説明されている。

『家族構成』以外の、戸田の家族に関する著作、『家族の研究』（１９２６年　弘文堂）、『家族』（１９２８年　大思想エンサイクロペヂア　春秋社）、『家族と婚姻』（１９３４年　中文館書店）、『家族』（１９４１年　岩波講座「倫理学」）、『家族社会学』（１９４４年

日本国家科学大系２　実業之日本社）、等にも、直接的ではないものの、この問題に関する論及が各所でなされている。それらによって、この問題に関する戸田の考え方を検討すると、感情融合の成立する要因は、血縁連鎖の事実にではなく、むしろ当事者相互の間の「接触」に求められている。

つまり主著である『家族構成』をはじめとする戸田の家族論では、家族の定義の基本に据えられた「感情融合」の起源に関して、それが血縁連鎖の事実から生まれるとする考えと、それは成員の社会的接触から生まれるとする考えとが、併存し、その間に十分の説明がなされていないことがわかる。

この問題について、戸田の考え方をさらに深く知るために、次ぎに戸田の一般理論を検討する。『社会学講義案一、二』（１９２８年　弘文堂）、『社会学（上）、（下）』（１９３２年　講座哲学　岩波書店）、『社会学概論』（１９５２年　有斐閣）により、戸田の社会過程論、すなわち社会関係生成のメカニズムに関する考え方を見ると、その根幹が「接触」と、それによって引き起こされる「順応」・「反撥」作用、またそれに伴う意識内容の相互的「伝達・受理」と、そこから生まれる合一的ないし調和的対人関係という論理構造にあることが判明する。つまりそこでは社会関係一般の起源が、「接触」から説明されているのである。そうなると戸田家族理論の問題点は、彼自身が一般理論として展開した論理、すなわち「接触」を鍵概念とする社会過程論をもって家族を一貫して説明する姿勢が不徹底であったことに帰着すると言える。

そうして、高度に抽象的なこの「接触」という概念を、歴史的現実のレベルに移して考えるならば、様々な文化に規定された様々の社会における独自の感情融合のあり方と、成員の生活保障の拠り所としての独自の家族生活のあり方とが、次の問題として当然登場すると理解されるのではないだろうか。有賀説は戸田説への「アンティ・テーゼたるべきことを意識してたてられた概念」（森岡清美「家族の構造と機能」（福武直編『講座社会学　第四巻　家族・村落・都市）』１９頁）であれば、両者の相対的関係を一つの発展方向の上に位置づけることが可能であり、その間にある「安易な調停」を許さぬとされる問題を解く鍵の一つは、この「感情融合」の起源をどの様に考えるかという点にあると言えよう。

なお本論中の『家族構成』からの引用は昭和１７年の第三版によった。

（さかい　たつろう　慶應義塾大学文学部）